

ICT技術を活用した陸上との連携による船員の健康確保対策の強化 (遠隔健康管理システム実証実験①)

【資料4】

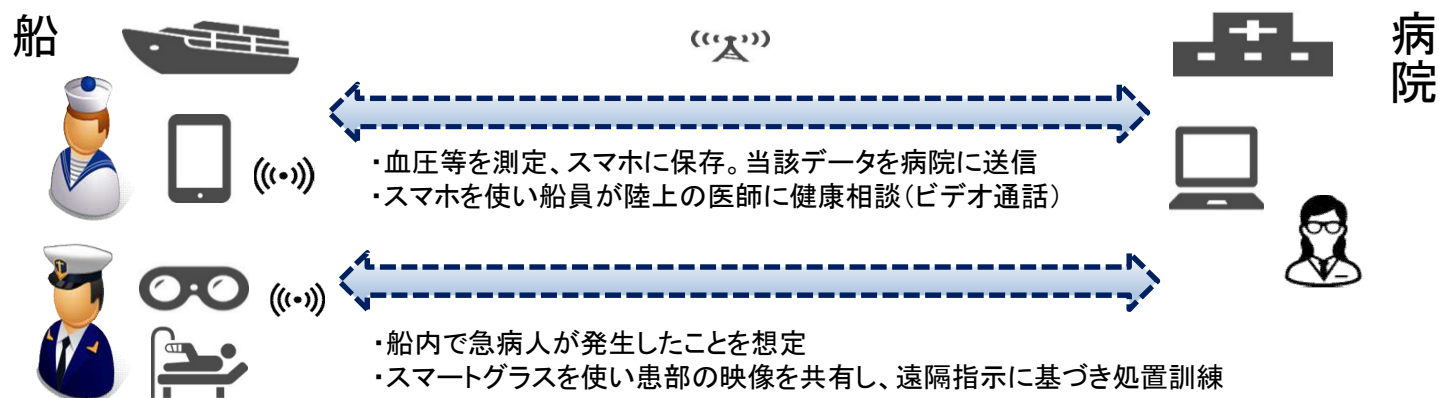
<現状>

- 航海中の労働環境は限られた空間の中で職住一体生活となり、陸上労働者以上の負荷がかかる。
- 陸上から離脱されているので医療機関を自由に受診したり、健康相談をすることはできない。
- 航海中の船内で急病人や怪我人が発生した場合「無線医療助言事業」を利用するが、医療の専門家ではない衛生担当者が、傷病者の症状を電子メールや電話で適確に陸上の医師に報告することは負担である。

ICT技術を活用した遠隔健康管理システムの試行

○実施日、場所、対応者

- ・第1回目 平成31年3月8日、第2回目 平成31年3月12日
- ・第1回目 君津港に停泊中の君津丸(協同商船の運航管理船10,741トン)⇄横浜掖济会病院
- ・第2回目 須崎沖約10キロの海域を航行中の君津丸⇄横浜掖济会病院
- ・対応者: 君津丸船員6名、横浜掖济会病院医師1名



ICT技術を活用した陸上との連携による船員の健康確保対策の強化 (遠隔健康管理システム実証実験②)

- 健康相談(船側)
船員がスマホを使って会話している様子



- 健康相談(病院側)
医師がタブレットを使って会話している様子



○実施状況

<健康相談>

- ・概ねスムーズに会話できた。時々、不具合(画像や音声の途切れ、特定のキャリア(携帯電話の通信サービスを提供している会社)での通話不能)が生じることもあり、要因分析が必要。

<緊急時対応訓練>

- ・通信状況が悪いエリアでは不具合が生じた為、要因分析が必要。

○参加した船員からの声

- ・船員は海上で働いており、病院に通いにくい為、遠隔健康管理は、通信状況が改善されれば有益なものになる。
- ・スマートグラスの使用は、自分の見ているものを言葉にできなくても医師に伝えられる点が有意義である。
- ・今回の通信状況を見ると、確実に、健康相談を予定した日時に行えるか、緊急時にスマートグラスを使えるか分からない点もあり、船内通信環境、通信のタイミング(航行エリア)等の工夫が必要。



<課題>

通信環境、事業者の理解、費用負担、健康相談の担い手(医師、保健師等)の確保等の検討

- 緊急時対応処訓練(船側)
医師の遠隔指示で喉の状態を確認している様子



- 緊急時対応処訓練(病院側)
医師が患者役の船員の腹部を押してみるよう指示している様子

